

## 実践報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究12  
P.24-31 (2024)

## アクティブラーニングを促す小児看護技術演習の取り組みと運営上の課題

Pediatric Nursing Skills Exercise to Promote Active Learning  
and Evaluation by Students

林 亮\* 齊 藤 麻 子\* 石 田 由 紀 子\* 西 田 み ゆ き\*  
HAYASHI Ryo SAITO Asako ISHIDA Yukiko NISHIDA Miyuki

## 要 旨

【目的】アクティブラーニングを取り入れた小児看護技術演習の運営上の課題を学生への質問紙から評価すること。

【方法】対象は看護系大学3年生126名とし無記名で収集した。質問内容は技術習得状況と試験での達成状況への自己評価を5段階のリッカートスケールにて、演習運営への意見を自由記述で求め、量的データは記述統計、質的データは内容を整理しカテゴリー化した。

【結果】104名から回答を得た。記述統計では93%が技術獲得できた、78%が実技試験で成果発揮できたと回答した。自由記述では、自主練習に対し【写真付き資料、試験のポイントの明示により、自己学修しやすかった】【直接指導やデモンストレーションが欲しかった】等の6カテゴリーが、実技試験に対し【適切な緊張感だった】【学修の動機づけとなった】【個別に評価・指導を受けたかった】等の10カテゴリーが見出された。

【考察】記述統計から、自己評価ではあるが技術習得は達成できたと判断できる。写真付き資料、試験のポイントの明示、試験による動機づけ等が寄与したと考えられるが、一方で直接指導や個別指導を望む意見も散見され、教員の巡回やスケジュールの提示等の改善の余地を認めた。

索引用語：アクティブラーニング、反転授業、小児看護、技術演習

Key words : Active Learning, Flipped Classroom, Pediatric Nursing, Technical Exercises

## 1. 背景

2012年、中央教育審議会の答申、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」<sup>1)</sup>において、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材を育成するためには、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思

疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（以下、アクティブラーニングとする）への転換」が提起された。

看護基礎教育へのアクティブラーニングの活用に関する取り組みについて、佐藤ら<sup>2)</sup>は、TBL、シンクペアシェア、ロールプレイ、PBL、ジグソー法、反転授業、LTD等、多くの方法がとられていることを報告している。アクティブラーニングの手法の1つである反転授業は、2012年の文部科学省中央教育審議会で、従

\* 順天堂大学保健看護学部

\* Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing

来の講義中心から学生参加の授業への転換が重要とされ導入が推奨され、注目を集めている<sup>3)</sup>。反転授業とは、「従来教室の中で行われていた授業学習と、演習や課題など宿題として課せられる授業外学習とを入れ替えた教授学修の様式」であり、学生への予習としてオンライン教材などで講義部分を時間外学習させ、授業時間では予習した知識の確認やその定着および活用、協働学習を含めたアクティブラーニングを実施するものである<sup>4)</sup>。

研究者らは2013年度から小児看護学における看護技術の演習を行ってきた。演習内容はバイタルサイン測定、乳児の身体計測、輸液管理とし、技術演習ノートにて基本事項を事前学習した上で、授業内で教員のデモンストレーション後の演習を行っていた。しかし、これまでの演習では、学生が実技演習を行う場合は授業時間内に限られていたため、個々としての経験が十分に確保されていないことが課題であった。その結果、実習開始の時点で十分な技術や知識の修得には至らず、実習期間中に追加練習で補っているケースが多かった。

そこで、各自のペースに合わせた確実な小児看護技術の獲得を目的とし、技術到達目標の視覚化と授業時間外での自主練習の時間と環境の整備および演習機器の開放による各自のペースに合わせた自主演習、授業内での技術試験による修得技術のアウトプットを主眼とした演習を組み立てた。これらは、技術到達目標の提示および自己評価チェックシートによる学生個々の到達度評価の促しや、演習機器の常時開放による学生自身のペースで学修できる環境の設定により、学生の自主性の向上およびより確実な技術修得を狙ったものである。今回、演習の更なるブラッシュアップのため、実施した演習及び試験の運営上の課題を学生への質問紙から評価し、報告することとした。

本研究の目的は、アクティブラーニングを取り入れた小児看護技術演習の運営上の課題を学生への質問紙から評価することである。

## II. 看護技術演習と実技試験方法

技術演習の項目は、「乳児のバイタルサイン測定」「身体計測」および「輸液・安全管理」とした。

### 1. 自己学修用に作成したツール

講義内で以下のツールを学生に配布し、看護技術のポイントと技術試験方法の説明を行った。①小児看護

課題	乳児のバイタルサイン測定
	肺炎で入院している乳児のバイタルサインを測定する。
	①対象のこどもにあった物品を準備する。 ②こどもに声をかけ、対象にあった方法、順序で測定する。 (安全や正確な測定のためのポイントは、ていねいに確実に行う。) ・呼吸数・心拍数は1分間測定する。 ・呼吸音(肺雑音、エアー入、左右差等)も聴取する。 ・体温計は正しく入れる。(測定には20秒ほどかかるものとする。) ・血圧は、上腕動脈を必ず触知してから測定する。 ③測定終了後はこどもに声をかけ、衣服・かけものを整える。 ④測定値(呼吸数、心拍数)はメモする。(提出あり) ⑤物品を(マンシュートは外して)元の位置へ戻す。
評価ポイント	・こども・家族に適切に声をかけたか ・測定方法は乳児にあっているか ・測定順序は適切か ・呼吸音、心音を解剖学的に正しい位置で聴診しているか ・1分間の呼吸数・心拍数を正確に測定できたか ・体温計を正しく入れ、確実に支えたか ・血圧測定…サイズの合ったマンシュートを、適切に巻いたか …上腕動脈を触知したか …加圧量は適切か …減圧スピードは適切か ・こどもから目を離さず、安全に行えたか ・露出に留意し、終始こどもに適切に声をかける、あやすなどこどものストレスを少なくする配慮はできたか?

図1 試験評価項目(バイタルサイン測定)

事前練習用チェックリスト			
乳児のバイタルサイン測定	練習日(必ず記入)	/	/
・こども・家族に適切に声をかけたか			
・測定方法は乳児にあっているか			
・測定順序は適切か			
・呼吸音、心音を解剖学的に正しい位置で聴診しているか			
・1分間の呼吸数・心拍数を正確に測定できるか 呼吸数…啼泣や動きを想定し正確に測定する方法を検討・練習する 心拍数…120~150回/分程度の数を正確に数える工夫や練習をする			
・体温計を正しく入れ、確実に支えたか			
・血圧測定…サイズの合ったマンシュートを、適切に巻いたか …上腕動脈を触知したか …加圧量は適切か …減圧スピードは適切か			
・こどもから目を離さず、安全に行えたか			
・露出に留意し、終始こどもに適切に声をかける、あやすなどこどものストレスを少なくする配慮はできたか?			

図2 試技術到達度自己評価チェックシート(バイタルサイン測定)

技術ノート（技術ポイントの穴埋め及び指定された箇所に関する説明の書き込み；実技試験2か月前）、②技術項目別の試験評価項目（実技試験2週間前）、③技術到達度自己評価チェックシート（実技試験2週間前）。一例としてバイタルサイン測定の試験評価項目を図1に、技術到達度自己評価チェックシートを図2に示す。

## 2. 自主練習

学生が自由に自主練習できるよう、試験前の12日間、演習室3室に常時練習用物品の設置と技術の様子を撮影した写真とポイントのパネル（以下、写真付き資料）を掲示した。試験に向けた評価ポイントを示したチェックリスト（技術到達度自己評価チェックシート）を配布し、学生自身が達成状況の自己評価を促した。教員によるデモンストレーションは行わなかったが、本学で提携している動画eラーニングサービスであるNursing Skills (ELSEVIER JAPAN) の視聴を促した。自主練習期間中は、小児看護教員が演習室を複数回訪室し、練習中の学生に手技へのアドバイスを適宜行った。

## 3. 実技試験

実習室内を3ブースに分け、それぞれ「乳児（生後3か月程度）のバイタルサイン測定」「乳児（生後10か月程度）の身体計測」「輸液・安全管理」の実技試験を行った。1ブースで同時最大5名の学生に対して試験官1名を配置し、チェックリストを用いて5名分を同時に評価した。学生は順不同に全項目を受験した。なお、同時に複数人の評価を行う為、実技試験の評価内容およびチェックリストは最低限の内容かつ客観的に把握しやすい行動面に限定した内容に限定した。実技試験後、グループ全体に対して共通して評価の低かった項目に対してフィードバックを行った。各ブースの試験時間は試験が7分、グループへのフィード

バックコメントが3分、計10分とした。なお、試験内容は技術項目別の試験評価項目として事前配布していたため、受験の順序性による不利益は発生しない。

## III. 研究方法

2023年1月～2023年3月の間に、2022年度小児看護方法論Ⅱを受講した3年生121名を対象として、アンケート調査を行った。アンケートは小児看護方法論Ⅱの試験終了後にGoogle Formにて無記名で回収した。アンケートの内容は、自主練習における技術修得状況および実技試験における達成状況への自己評価を5段階のリッカートスケールにて、演習及び試験運営への意見を自由記述で求めた。

分析は、量的データはExcelにて記述統計を行った。質的データは内容を整理し、カテゴリー化した。

## IV. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、順天堂大学保健看護学部研究等倫理審査委員会の承認を得て行った（順保倫第4-15号）。データ収集は無記名で行い、個人情報の保護に努めた。成績確定後、匿名性の保持、成績評価に影響がないこと、研究への協力は自由意思であることを文書にて説明した上で実施した。オンラインアンケートの回答送信をもって同意とみなした。

## V. 結果

### 1. 記述統計

104名から回答を得た（回収率83%）。自主練習における技術修得状況では、40%の学生が「修得できた」、53%が「ある程度修得できた」、5%が「どちらでもない」、2%が「あまり修得できなかった」と回答した。実技試験における達成状況では、26%の学生が「発揮できた」、51%が「どちらかというとは発揮できた」、12%が「どちらでもない」、10%が「どちらかというとは発揮できなかった」、1%が「発揮で

きなかった」と回答した。

## 2. 看護技術演習への学生からの意見

本研究では、カテゴリを【 】, サブカテゴリを〈 〉で表記した(表1)。

### 1) 技術演習

技術演習に関する意見として、126のコード、18のサブカテゴリが抽出され、以下の6カテゴリが見出された。

【写真付き資料、試験のポイントの明示により、自己学修しやすかった】は3サブカテゴリで構成された。写真付き資料、試験のポイントの明示、演習前の講義など、自己練習に必要な情報の事前提示が学生の自己学修を促していたことが記述されていた。

【適切な物品配置と自主練習期間や練習内容の短時間化でスケジュール調整がしやすかった】は5サブカテゴリで構成され、2週間にわたる物品の常設や、1つ1つの技術が短時間で演習可能な範囲であったこと、ユニフォームへの着替え等の準備を行わなくとも演習できる環境により、授業の隙間時間を活用したスケジュール調整がしやすかったことが記述された。

【協働学修することができた】は1サブカテゴリで構成され、資料を参考にしつつ、友人とアドバイスしあいながら練習するといった協働学修が促されたことが記述された。

【直接指導やデモンストレーションが欲しかった】は3サブカテゴリで構成され、資料だけではわからない技術の要領の指導や自分の技術の客観的評価等、デモンストレーションや直接指導の要望が記述された。

【他の課題と重複しスケジュール調整が難しかった】は2サブカテゴリで構成され、他の科目の授業日程や課題が重複することから、定められた期間内でスケジュールを調整することの困難さが記述された。

【練習物品の量や不具合など設置が不十分だった】

は4サブカテゴリで構成され、練習物品が限られていることや、故障している物品があったこと、物品が試験と異なるものがあったこと等、練習物品の設置の不十分さに対する意見が記述された。

### 2) 実技試験

実技試験に関する意見として、99のコード、19のサブカテゴリが抽出され、以下の10カテゴリが見出された。

【適切な緊張感だった】は2サブカテゴリで構成され、グループ試験だったことであったことで緊張がやわらいだ、もしくは適度に緊張感があったことで気が引き締まったというように、緊張感が適切であったことが記述された。

【広く技術を修得できた】は2サブカテゴリで構成され、十分に練習した上で3種類の技術全ての試験を受けることができた達成感が記述されていた。

【学修の動機づけとなった】は2サブカテゴリで構成され、実技試験を設けることで気が引き締まったことや目標が明確であったことが学修の動機づけとなっていたことが記述された。

【フィードバックやグループでの振り返りで課題が明確になった】は2サブカテゴリで構成され、試験直後に行ったフィードバックや、試験後にグループメンバーで自主的に振り返ることで、自己の課題が明確になったことが記述された。

【適切な試験方法だった】は3サブカテゴリで構成され、時間配分の適切さや、グループ試験であったことでスムーズに運営されたこと等から適切な試験方法だったという意見が記述された。

【個別に評価・指導を受けたかった】は2サブカテゴリで構成され、グループ全体に対してのフィードバックに対して、平等に見てもらえているのかという不安や個人的なアドバイスを求める意見が記述された。

【一斉試験により緊張感の過不足があった】は2サブカテゴリで構成され、5人同時の一斉試験であっ

表1 カテゴリー一覧

カテゴリー	サブカテゴリー(コード数)	コード例
自主練習	〈写真付き資料、試験のポイントの明示により、自己学修しやすかった〉	説明の紙が設置されていたので理解しやすかった 練習場所にポイントが記載されており、どこを気をつけるのかを確認しながら行うことができた 実技試験のポイントを示したレジュメがわかりやすかった やるべきことが明確に記載されていて、友人と協力してしっかり取り組むことができた 事前に各技術について講義があったため、自主練習に取り組みやすかった 授業内でしっかり説明してくれたため、自主練習でも分からないで困ることはなかった
	〈適切な物品配置と自主練習期間に合わせて短時間化でスケジュール調整がしやすかった〉	〈適切な物品が準備されていた〉(4) 練習期間が十分にあり、また道具も各4つずつ用意されていて、本当に練習しやすかった 心拍等を聞きながら練習できたのがすごくよかった 練習期間はある程度長い期間設けられていたので空いた時間を使って自主練習出来た 事前課題はページ数が多かったが早めに配って頂いたので負担が多すぎということは無かった
	〈協働学修することができた〉	〈自分のスケジュールに合わせて練習することができた〉(8) 混雑しない時間に自主練習がおこなえたのでスムーズにできた 試験内容が事前に全て提示されたため計画的に練習できた 着替えが不要だったので隙間時間で練習できた(2) いちいちナース服に着替える必要がなくなったのが練習しやすくて良かった 実習服に着替えずに行えたことで、少ない時間でも友達と工夫して何度も練習することができた
	〈直接指導が欲しかった〉(7)	〈短時間で出来る演習内容だったため調整しやすかった〉(1) 各技術内容は短時間でできるものであったため、学生間で時間に考慮しながら行うことができた みんなと確認しながら練習を行うことができた 図や写真付きの参考の資料を元に友達と確認しながら練習できた点良かった
	〈他の課題と重複しスケジュール調整が難しかった〉	〈デモンストレーションをして欲しかった〉(5) わからない時にすぐに先生に聞けないため、巡回システムがあると聞きやすい 技術練習の時間のタイミングによって先生に教えてもらえる人とそうでない人と分れてしまった 実演してる動画とかあったらもっと良かった デモンストレーションの動画などが欲しかった
	〈練習物品の量や不具合など設置が不十分だった〉	〈指導内容を統一して欲しかった〉(2) 先生ごとに技術のやり方の説明が違って、混乱してしまっていたので、統一して欲しい 先生によって指導内容が違ったので統一してほしい 他の課題の量が多くて練習が思った以上にできなかった テスト期間(他科目)ということもあり、練習はできてなかった もう少し練習する期間が欲しかった 自主練習の期間が短く、授業日程と合わせながらだと思いうように練習できなかった モデルが少なく、空き時間などは学生がたくさん集まるため練習時間を確保するのが難しかった
	〈適切な緊張感だった〉	〈練習場所と物品が限られていたため混雑した〉(27) 空きコマなど学生が集中する時があったのでもう少し人形の量が多いとありがたかった 〈故障している器具があった〉(1) マンシエットが壊れてしまっていて一部使えなかった 〈試験と同条件で練習したかった〉(1) 技術テストと練習では異なるサイズの人形が使用されていた 〈人形への声かけが難しかった〉(1) 乳児への声かけが難しかった
	〈広く技術を習得できた〉	〈緊張せずよかった〉(11) 何人か同時に実施したのであまり緊張せず練習のときの感じでできた 先生と1対1ではなかったため、落ち着いて試験を受けることができた 〈緊張感がありよかった〉(2) とても緊張感のある中で試験を行えたことが実習に活きたと思った 適度に緊張感を感じたため、気を引き締めて行うことができた
	〈個別に評価・指導を受けたかった〉	〈手技の理解を深めてから試験に臨めた〉(1) 自主練習できるような時間があったため、手技の理解を深めてから試験に挑めた 平等に全ての項目を回ったため、しっかり身についた 1日に全部の実技試験を順番にできる方法は良かった
	〈自主練習と条件を統一して欲しかった〉	〈学修の動機づけとなった〉(4) 実技試験であったため意識的に身を引きた やり方を緊張の中でも正しくできるかを試す機会があり、反省点も見つかった 〈目標が明確で練習しやすかった〉(1) 何をどのように行うとよいのかが明確化されていて練習に取り組みやすかった
実技試験	〈適切な試験方法だった〉	〈グループで振り返ることができた〉(3) 試験終了後に一緒にやっていたメンバーと試験について振り返ることができた 自分より前の友達をやっている所も見ることが出来たので参考になった 〈直後のフィードバックで課題が明確になった〉(22) その場でフィードバックがあり、できていなかったことに気づくことができ、印象にも残った 実技試験直後のフィードバックで試験内容を忘れないうちに振り返ることができた
	〈個別に評価・指導を受けたかった〉	〈時間がちょうどよかった〉(1) 時間が足りない項目もあったが、効率のよく手技を行う力を身につけるためにはちょうど良い 一度に5、6人で試験を行うことで時間的にスムーズで良い 時間割がわかりやすく、順番通りに遅れることなく進めることが出来た
	〈自主練習と条件を統一して欲しかった〉	〈適切な試験方法だった〉(9) 練習成果を発揮出来る試験方法だった
	〈試験物品の違いがあり不公平だった〉	〈個人に評価して欲しかった〉(7) 試験官の教員に見られている人と見られていない人の差が大きいように感じた 先生の目に触れている人と触れていない人で評価が異なっていると思った 〈個別のフィードバックが欲しかった〉(7) 個人の点数やできていなかった部分などを個別的にフィードバックしてほしい 先生1人に対して生徒1人に細かくフィードバックが欲しい
	〈自主練習と条件を統一して欲しかった〉	〈緊張感が足りなかった〉(3) 練習したのにそこまでガチガチではなく少しショックだった あまり緊張感がない感じがした
	〈試験物品の違いがあり不公平だった〉	〈一斉試験で緊張した〉(1) 一斉試験でやると周囲の雰囲気少し焦ってしまった
	〈自主練習と条件を統一して欲しかった〉	〈モデル人形の設定を統一して欲しかった〉(8) 心音、呼吸音が聞こえにくいモデルがあったため、練習時にもそうしたモデルがあると有難い 人形の大きさで時間が足りず不平等な部分があった ベッドの棚がもともと固い場所があり、試験本番で自分はその場所に当たってしまった ベッド柵を動かすとき、多少は鳴ってしまうベッドがいくつかありそうだった
〈時間が短かった〉	〈演習と条件を統一して欲しかった〉(5) 練習時に使用していた人形の重さや、衣服の着脱も練習とは異なり大変だった 練習に使われた大きさの赤ちゃんと本番大きさが異なり、うまく更衣ができなかった 時間追われ本来の力が発揮できないように感じた	

たため、緊張感が足りなかった、もしくは過度に緊張したという意見が記述された。

【試験物品の違いがあり不公平だった】は2サブカテゴリーで構成され、モデル人形の呼吸や心拍の音量・数値の設定の違いやサークルベッドの不具合等、試験物品の設定上の問題による不公平についての意見が記述された。

【自主練習と条件を統一して欲しかった】は1サブカテゴリーで構成され、演習時に設置していたモデルと試験本番で使用したもののサイズや可動域の違いから困惑した思いや条件の統一を求める意見が記述された。

【時間が短かった】は1サブカテゴリーで構成され、試験の設定時間の短さから時間内に全て終わることが出来ず、本来の力が発揮できないという意見が記述された。

## VI. 考察

### 1. 学生の自己評価

93.3%の学生が技術習得できたと感じ、78%の学生が自主練習・学修の成果を発揮できたと感じていた。本演習の目的は学生個々のペースに合わせた確実な小児看護技術の獲得を目的としており、あくまで学生の自己評価ではあるものの、達成できたことを示している。今後、臨地実習での実践状況との関連の評価など、客観的な評価を含めた技術獲得状況について調査を進める必要がある。

### 2. アクティブラーニングを促すための環境設定の評価

#### 1) 演習室の設定

技術演習の効果として、【写真付き資料、試験のポイントの明示により、自己学修しやすかった】【適切な物品配置と自主練習期間や練習内容の短時間化でスケジュール調整がしやすかった】【協働学修すること

ができた】が見出されたが、その一方で、阻害要因として、【直接指導やデモンストレーションが欲しかった】【他の課題と重複しスケジュール調整が難しかった】【練習物品の量や不具合など設置が不十分だった】が見出された。本演習はアクティブラーニングの実践に向け、技術到達目標の視覚化と演習機器の開放による各自のペースに合わせた自己演習、授業内の試験による修得技術のアウトプットにより構成した。ポジティブな影響要因として、到達目標の提示、適切な物品準備、適切な練習期間の確保が見出されたことから、教員の狙い通りの成果が得られたと言える。しかし、同様の環境に対しても自主練習期間の短さ、演習場所・物品の少なさが抽出され、他の科目の課題との重複に示されたように、自宅が遠方であるなど、授業の合間での練習を計画していた学生にとって、融通の利く時間帯は他の学生と重複していたことが予測され、学生が集中してしまう時間帯があったことが予測される。演習場所や物品の拡充や期間の延長に加え、学生への注意喚起等により、学生の分散を計る必要がある。

#### 2) 教員による指導の在り方

指導上の工夫として、演習のポイントや目標の明確化を行った。これらはポジティブな影響要因として示されており、効果的であったことがうかがえる。さらに、【適切な物品配置と自主練習期間や練習内容の短時間化でスケジュール調整がしやすかった】で示されたように、学生はユニフォームへの着替えが不要であることや1つ1つの技術が短時間でできるといった要素により練習時間を調整できていたため、この方法は継続していく必要がある。一方で、教員からの直接指導を望む意見も示された。土佐<sup>5)</sup>は、自己学修用の教材の課題として、事前に学修事項を理解することが出来れば、授業中に分からなくなる状況を回避でき、学習者の不安を解消できるとする一方で、内容をよく理解できない場合、繰り返し課題に取り組むことが理解の助けにはなりがたく、さらには、それ以上学習を進

める意欲を失わせる可能性を指摘している。サークルベッドの柵の上げ下ろしのコツなど、文字や写真の情報では読み取りにくいポイントに対する指導機会として、教員の巡回の回数を増やしたり説明動画等の提示の対応を検討する必要がある。

試験物品について、モデル人形の個体差や不具合、演習時と異なる条件に対して、統一性を望む意見が見られた。市川<sup>6)</sup>は、技術実技試験に対して緊張しやすい学生は頻回に実習室を利用し練習し、基本に忠実に繰り返し練習することで緊張しないように対処しているとしている。実際に教員による評価を求めた学生が一定数いたことは、自分が技術習得できているか否かの判断を迷う学生もいたことが想像できる。モデル人形の管理を徹底するとともに、演習時と異なる条件となる場合には事前に説明を入れる必要がある。また、自己の技術習得状況を自己評価できるようにすることが重要である。評価基準の明確化はしているが、学生が理解に至るものであった可能性もあるため、提示方法を見直す必要がある。

### 3) 試験の設定

実技試験のポジティブな効果として、適度な緊張感や直後のフィードバックに支えられた【学修の動機づけとなった】【フィードバックやグループでの振り返りで課題が明確になった】【広く技術を修得できた】が見出された。その一方で、【個別に評価・指導を受けたかった】【一斉試験により緊張感の過不足があった】【試験物品の違いがあり不公平だった】【自主練習と条件を統一して欲しかった】【時間が短かった】といったネガティブな要素も見出された。中野<sup>7)</sup>は、反転授業は学習者の意欲は不可欠であり、学習意欲の向上には一般的にピアプレッシャーが力になるが、難しい場合には成績評価とリンクさせるなど「どうしても予習してこななければならない」何らかの手段を講じる必要性を指摘している。同様に、教員の目が個人に向けられないため、【個別に評価・指導を受けたかった】

のような意見が散見された。これは先述のように自己学修用の教材の内容をよく理解できない場合、繰り返し課題に取り組むことが理解の助けにはなりがたい<sup>5)</sup>ことが影響していると考えられる。森<sup>8)</sup>は、内化（必要な知識のインプット）と外化（知識を活用して何らかの課題解決を行うアウトプット）の往還の仕上げを、学生同士の学び合い・教え合いに任せてしまうと、適切な理解に結び付かない可能性を指摘している。確実な技術習得や学生の自信につなげるためには、自己練習中、もしくは実技試験にて学生個々の技術に対する評価を取り入れる必要がある。本学の教員数と学生数の割合から個別の指導に割く時間の限界は否めないが、学生は常に教員からの個別の指導を求めていることが明らかになった。学修効果としても教員が個別に関わられるような環境の確保の必要性が示唆された。

## VII. 結論

各自のペースに合わせた確実な小児看護技術の獲得を目的とし、技術到達目標の視覚化と演習機器の開放による各自のペースに合わせた自主練習、授業内の実技試験による修得技術のアウトプットを主眼とした演習を組み立てた。概ね学生の自己学修を促したものであったが、自己演習や試験のフィードバックにおける教員による学生個々への疑問解決および評価を混じえた指導の必要性が示唆された。また、今回の実技修得状況の評価はあくまで学生の自己評価によるものであったため、臨地実習での実践状況との関連の評価など、客観的な評価を含めた技術獲得状況について調査を進める必要がある。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2012)：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～。

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyuo/](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyuo/)

[chukyo0/toushin/1325047.htm](http://chukyo0/toushin/1325047.htm) (2023.3.13 閲覧)

- 2) 佐藤栄子, 青山みどり, 今泉郷子: 看護基礎教育におけるアクティブラーニングの現状と学修評価, 足利大学看護学研究紀要, 10(1), 1-15, 2022.
- 3) 中川潔美, 平良美栄子: 大学教育における反転授業の実践に関する文献検討, 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 2, 7-13, 2016.
- 4) 森明子, 溝上慎一: アクティブラーニング型の授業としての反転授業 (理論編), ナカニシヤ出版, 京都, 2017.
- 5) 土佐幸子: 反転授業の長所と短所を探るー「反転」ではなく「事前」授業をー, 大学の物理教育, 20, 61-65, 2014.
- 6) 市川美奈子, 小池祥太郎, 沼田祐子, 他: 看護学生の自己学習活動及び共感性と看護技術実技試験成績との関連, 青森保健医療福祉研究, 1, 11-19, 2019.
- 7) 中野彰: 反転授業の動向と課題, 武庫川女子大学情報教育研究センター紀要, 23, 35-38, 2015.
- 8) 森朋子: 反転授業のデザイン, 化学と教育, 64(12), 596-599, 2016.